

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18500656

研究課題名（和文） 国際比較に基づく日本型環境教育の理想的モデルに関する研究

研究課題名（英文） A Study on the ideal type of the Japanese environmental education based on international comparisons

研究代表者

柴崎文一（SHIBASAKI FUMIKAZU）

明治大学・政治経済学部・教授

研究者番号：90260124

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学・科学教育

キーワード：環境教育，環境思想

### 1. 研究計画の概要

環境問題は、原因を探求し、その原因を取り除くことによって、問題の解決に至るといふ方向性をとることができない。なぜなら、環境問題の原因には、地球規模での人口増加や、経済活動の発展といった難問がよこたっており、これらを直接的な方法で解決することは、現実上、不可能だからである。しかし、およそ全ての環境問題は、原理的に、環境への人為的負荷によって生じていることを思うなら、望ましい環境意識を有した人間を育てることによって、問題の根本的解決を図ることは可能であるばかりか、これこそが、唯一可能な環境問題の根本的な解決策であるとすら言えるだろう。しかし我が国における環境教育の現状は、アメリカやドイツなどの環境教育先進国に比較してまことに貧弱なものではないと言わざるをえない。このような観点から本研究は、環境教育・環境思想の先進諸国における諸理論の国際比較を通し、我が国の現状に適応した日本型環境教育の理論的基礎研究を行うものである。

### 2. 研究の進捗状況

(1) 平成18年度は、アメリカの環境教育について調査・研究を行い、特にプロジェクト・ワイルドとプロジェクト・ラーニング・ツリーに関する最新の内容を把握することに努めた。プロジェクト・ワイルド(Project WILD)は、アメリカのWREEC(西部地域環境教育協議会)とWAFWA(西部地域魚類・野生生物局協会)が、幼稚園から高等学校までの児童・生徒を対象として策定した環境教育のパッケージプログラムであり、1983年に最初のプログラムが公開されている。そ

の後、2000年の大幅な改定をへて、現在はCEE(Council for Environmental Education)によって管理と普及が行われている。日本では公園緑地管理財団がライセンス契約のもとにテキストの翻訳、ワークショップ等を行っている。しかし日本語版は、改定前の1997年版を原典として現在も使用しているため、この重要な変更が反映されていないという重大な問題を抱えている。本年度の研究では、独自に入手した最新版のテキストを精査し、現在のプロジェクト・ワイルドの内容を正確に把握することに努めた。

(2) 平成19年度はドイツの環境教育について、調査・研究を行った。ドイツで行われている環境教育は、一般に、エネルギー問題やゴミ問題などの社会的環境問題に向けられたものが多い。もちろん、自然環境の保護や保全に向けられた活動も見受けられるが、私見では、社会的環境問題に対する意識の方がはるかに強いように見受けられる。本年度研究では、こうしたドイツの環境教育にみられる特質の把握に努めた。

(3) 平成20年度本年度は日本の環境教育の現状について調査・研究を行った。日本の環境教育には大きく二つの流れがあるように見受けられる。一つは学校教育の場において実施されているものであり、もう一つは市民活動や「自然学校」などの民間組織において実施されているものである。しかし学校教育における環境教育も、市民活動における環境教育も、個別的観点からの環境問題に対処しているものがほとんどであり、「環境」という総合的な問題把握への展開が欠けているように見受けられた。

### 3. 現在までの達成度

- ②おおむね順調に進展している  
(理由)

当初の計画通り、研究を行っているため、おおむね順調にしていると思われる。

### 4. 今後の研究の推進方策

最終年度は、本課題の取りまとめを行うことになるが、それに先立ち、これまでの研究では十分に取り扱うことができなかった点について、改めて研究を行いたい。とりわけ日本の環境教育を考え上では、各種市民団体が行っている環境教育の役割が極めて重要であるが、昨年度の研究では、主にわが国の学校教育の現場で行われている環境教育の現状を取り上げることにとどまり、各種市民団体で行われている環境教育の実体は考察対象とすることができなかった。それゆえ本年度は、まずわが国の市民団体によって行われている環境教育の現状を調査し、その現状を把握することにしたい。環境問題に関わるわが国の市民団体は多数存在するが、中でもひととき大きな規模と充実した内容の環境教育を展開している団体の一つとして、財団法人日本野鳥の会があげられる。日本野鳥の会は「科学と芸術の融合」を目指す知識人の自然保護団体として昭和9年に設立され、現在は会員数約5万人のわが国を代表する環境NGOの一つとなっている。全国各地に89の支部をもち、定期的な探鳥会はもちろんのこととして、野生動植物の保護を目的とした保護区を全国に22箇所設け、野生生物の保護を行うとともに、生物学的研究も幅広く行っている。またこれらの保護区の内には、ネイチャーセンターを設置し、専門のレンジャーを配置した環境教育施設もある。首都圏では、東京都の委託を受けて管理運営を行っている「東京港野鳥公園」と、横浜市の委託を受けて管理運営を行っている「横浜自然観察の森」が主なネイチャーセンターとしてあげられる。これらのセンターでは、野鳥の会のレンジャーが主体となった環境教育プログラムも実施されているが、センターを拠点とする市民団体によって実施されている環境教育プログラムも多数ある。本研究ではこれまでに、アメリカの野鳥の会である National Audubon Society やドイツの野鳥の会である Naturschutzbund Deutschland における環境教育の実施状況を調査しているので、わが国の野鳥の会で行われている環境教育と、これら諸外国の関連団体で行われているプログラムとの比較研究を行いたい。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 柴崎文一, 「持続可能な開発」は可能か? —熱力学の観点から—, 駒澤大学『仏教経済研究』第35巻, 17-25, 2006, 査読無
- ② 柴崎文一, 「脳死」と人の死, 明治大学政治経済研究所『政経論叢』, 第75巻第1/2号, 137-163, 2006, 査読有
- ③ 柴崎文一, 他者の苦しみ: <苦しみの経験>をめぐるヘアーの分析理論を手掛かりとして『明治大学教養論集』, 416号, 1-19, 2007, 査読無
- ④ 柴崎文一, 論文「倫理学」(1960)におけるヘアーの<道徳>概念規定について, 『明治大学教養論集』, 427号, 57-68, 2008, 査読無
- ⑤ 柴崎文一, 仮説演繹法における帰納的性質について, 『明治大学教養論集』, 434号, 1-6, 2008, 査読無
- ⑥ 柴崎文一, エマソンの自然観, 『明治大学教養論集』, 436号, 55-63, 2008, 査読無

[学会発表] (計0件)

[図書] (計2件)

- ① 柴崎文一, サモンの「倫理学」ノート I —帰納的論証と言語哲学入門編—, DTP出版, pp. 88, 2008年
- ② 柴崎文一, サモンの「倫理学」ノート I —演繹的論証編—, DTP出版, pp. 98, 2009年

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

特になし